



TITLE:

フォン・ベロウ教授を憶ふ

AUTHOR(S):

上田, 藤十郎

CITATION:

上田, 藤十郎. フォン・ベロウ教授を憶ふ. 経済論叢 1928, 27(1): 138-142

ISSUE DATE:

1928-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129644>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷七十二第

行發日一月七年三和昭

論叢

一般社會學の概念 文學博士 米田庄太郎

經濟靜態について 文學博士 高田保馬

目的稅論 法學博士 神戸正雄

保險と偶然 經濟學博士 小島昌太郎

說苑

計算貨幣と交換貨幣 經濟學士 福井孝治

經濟法の概念 經濟學士 橋本文雄

雜錄

希臘現代の經濟學 法學士 山口正太郎

大戰中の佛蘭西の通貨 經濟學士 島本融

フォン・ペロウ教授を憶ふ 經濟學士 上田藤十郎

獨逸都市の財政統計 經濟學博士 沙見三郎

3 und 4 Hefte. (1927) によると、獨逸バーデンのフライブルグ大學前教授 Georg von Below 氏は一九二七年十月二十日遂に逝去せられた様である。曩に、鬼才 Max Weber 逝いて未だ幾許もならざるに、今又同教授の訃を聞く、誠に哀悼の念に堪えない所である。同教授の學説は、東京帝國大學の土屋助教授¹⁾、及同志社大學の石田教授²⁾により、譯述或は翻譯せられて既に我學界に紹介されてゐるが、此處に教授の業績を記して、故人を偲ぶよすがとしたいと思ふ。

一

フォン・ベロウ教授を憶ふ

上田 藤十郎

Georg von Below 教授は、西曆一八五八年一月十九日獨逸プロシヤのケーニヒスベルヒにて呱呱の聲を挙げた。長するや、一八七八年秋、同地の大學に入り、主として歴史學を學び、次で、ボン大學、柏林大學に遊びたる後再び、ボン大學に歸り、M. Ritter の指導を受け、一八八二年同大學を卒業した。その卒業論文の題目は、"Der Wahler des Bischofs auf das Domkapitel" であつた。同大學卒業後も歴史特に制度史の研究に従事してゐたのであるが、一八八六年、マ

15) Jules Decamps. Les changes étrangers. p. 271.
 16) 同上, p. 283. Louis Pommery, Changes et monnaies, p. 169.
 17) 前掲、金融委員會報告 327 頁。
 1) 土屋喬雄氏、經濟發達階段學説に對する G. v. Below の批評、(經濟學論集 第二卷第一號)

ルブルヒ大學の講師となり、一八八八年にはケーニヒスベルヒ大學に轉じ、翌一八八九年十月、同大學の員外教授に任命せられた。而して、一八九一年の Manns の後を襲つて、ミュンヘン大學の正教授となり、一八九七年には、マールブルヒ大學、一九〇一年には、チュービンゲン大學に轉じ、最後に、フライブルグ大學に招聘せられたるは一九〇五年であつた。爾來、約廿年間其職にあつて史學を講じて居られた。尙一九二四年同大學を退かれた後も、引續き同地にあつて、一九二七年十月二十日易簣せられる迄、學問精進に専念せられ倦む所を知らなかつたのである。

二

余は、同教授の學界に貢獻せる幾多の業績を此處に述ぶる前に、先づ、史家としての教授の學風を紹介したいと思ふ。

教授は、かのカントの思想にその源を發し、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを経て系統的に完成されたカント派歴史哲學の立場より、獨逸史學を開拓せる先

覺者たる L. v. Ranke の影響を受ける所多く、十九世紀後半期に於て全盛を極めたる實証主義的自然主義的唯物的見解に飽足らず、浪漫主義的理想主義的見解をとつたのであつて、かの偶然にも佛蘭西のコントと其軌を一にして實証主義的見解の下に『常則的なもの』のみを歴史學の眞の對象と見たるランプレヒト等とは其見解を異にし、『歴史的に重要なもの』、本質的なものは、普遍的なるものとして種々の歴史的現象より現はるゝものとは同一に非ず、かゝるものの中に對する關心を以てしては、我々が歴史の生命力を認識せんと欲するも得ないのである。變則も規則と同様に興味あり重要である。』となすのである。如斯、教授は歴史の法則性に關しては實証主義的自然主義的解釋をなさざるが故に、リツカートと同じく之が普遍妥當性を認めないのである。従つて、かのビュツヒャー等が經濟階段説定立の試みによつて、歴史的法則の發見、即ち、あらゆる民族の發達に共通して適用さるべき歴史的法則を樹立せんとする企てに對しても、其等

2) 石田秀一郎氏、資本主義の概念、同志社論叢大正十二年十一月號

3) G. v. Below 教授の傳記は、S. Steinberg 編集の Die Geschichtswissenschaft in Selbstdarstellungen (1925) の自傳に詳である。尙 Meyer の Konversationslexikon にも簡単な傳記がのせられてある。

4) v. Below, Die historische Methode, S. 48.

5) 同上、Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 189.

の階段説が單に「民族或は二三の民族の歴史によつて立論せられたるものなる以上——例へばかのシュモラ」の階段説が大體に於て單に獨逸民族の歴史に過ぎずと例証せるが如き、又ビュツヒャー自身も彼の階段説が「少くとも中央及西歐の諸民族に對して」妥當すると云へるが如きは是である——その普通妥當性を棄てざるを得ないと主張したのである。

然し乍ら、教授は經濟發達階段説の價値を輕視するものではないのであつて、我々が歴史的諸事實の歴史的構成に當つて、比較が我々の史的認識に寄與する所大なる限りに於て、研究の補助手段として利用するべきは疑を容れない所である。而して、そは一定の時に於ける一民族の狀態に適合せしめ得べき理想型として觀るときは、階段説の使用は許容さるべきものであると云つてゐる。所謂理想型なる概念は、マックス・ウェーバーによつて高調せられた所であるが、史學者の見地より、史論 (Historische Theorie) の中心概念をなすものとして論証せるは教授である。尙、教授は、

理想型構成が精密なる批判研究を経たる眞正の資料に基いてなさざるべからざるを説いて、故實博識を尊重すると共に、之により歴史の有機的生命を動的に把握せん事を志したのである。

三

以上述べたる所によりて、教授の史的見解並に立場は略々明にせられた事と信ずる。次に、教授が、學界特に經濟史學界に寄與せる業績は如何と云ふに、ブロードニッツに従へば、大別して三となすを得るであらう。即ち、第一、中世都市制度の研究、第二、資本主義の成立に關する研究、第三、農史方面の研究である。

第一の中世都市の研究は、初め制度史方面よりなされたものであるが、制度史的發達の根據が單なる法令のみに存せず、民衆の生活に求めざるべからずとの信念を得、爾來、經濟史の研究に移られたのである。教授の中世都市の起原及經濟的性質に關する有益なる諸論著の中、出色のものは、手工業並にギルドに關する

6) v. Below, Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 165.

7) K. Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, 1 Aufl. S. 14.

8) v. Below, Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 188-191.

9) Max Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftliche und sozialpolitischer Erkenntnis, Archiv f. sozialw. 19, S. 1.

10) S. Helander, Die Ausgangspunkte der Wirtschaftswissenschaft, S. 50.

研究であらう。次に、第二の資本主義の成立に關する研究は、ソムバルトの『近世資本主義』の研究に刺激されてなされたものであるが、併せて中世商業の意義を明にせんとせるものである。而して、教授は、資本主義とは、大資本が多く使用せられてゐる事、及び經營に参加する労働者が獨立性を有せざるに至りし事であるとの見解に基き、ソムバルトを中心にしてブレンタノ、マックス・ウェーバー等と資本主義の起原に關して大論争を開き、廿世紀に於ける經濟史學界をして活氣あらしめたるは周知の事實である。此論争に於て教授が重要な役割を演じたるの事實は何人と雖も否定し得ざる所であつて、資本主義研究者の看過すべからざる所である。最後に、第三の農史方面の研究に於ては、先づ、原始共產に關する研究を擧げなければならぬ。¹¹⁾次に西部獨逸及東部獨逸農史の根本的相違を指摘し、尙極めて概論ではあるが、ユルスター其他の編輯にかゝる „Handwörterbuch der Staatswissenschaften,“ 4 Aufl. 1923. Bd. I 所載の „Agrargeschichte“ は、此

方面の研究者にとり一讀すべき價值あるものである。教授は、夙に頭腦明晰を以て聞え、その該博なる智識と苦心して蒐集せる根本資料に基きてなせる鋭き論評は、讀者の敬服措く能はざる所である。教授の生涯は、論争を以て終始せるやの感なきにしも非ずと雖も、之が爲め、直接間接に學界を裨益せられた所は、蓋し、尠少ではないのである。

教授が、學界に遺されたる業績の主なるものは、大體右に述ぶるが如きものであるが、尙吾人の忘るべからざる教授の功績は、一九〇三年、かの休刊せる *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* (Freiburg, Berlin) 1893-1900 を H. Auben, St. Bauer, K. Kaser と共に再興し、その標題を改めて „*Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*“ として發行、該誌編輯者の一人として、爾來、其死に至る迄盡力せられた事である。同誌が、一九二八年度の第一、第二分冊合巻號を、教授の追悼號として、教授の學風、業績を

- 11) Georg Brodnitz, Recent work in German economic history. (The Economic History Review, vol. I, No. 2.)
- 12) v. Below Die Motive der Zunftbildung im deutschen Mittelalter, (Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 258-301)
- 13) 同上 Die Entstehung des modernen Kapitalismus. (同上 S. 399-500)
- 14) v. Below, Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 401.

追慕せんとするの企圖は、誠にふまぐめぬかしき事とせなければならぬ。

四

終りに、教授の主なる論著を掲げて、経済史研究の果とならん。

Die Entstehung des ausschliesslichen Wahlrechts der Domkapitel. (1883)

Die landständische Verfassung in Jülich-Berg. (1885-90.

3 Tle.)

Die Entstehung der Rittergüter. (1886)

Zur Entstehung der deutschen Stadtverfassung. (1887-

88)

Die Entstehung der deutschen Stadtgemeinde. (1889)

Über die städtische Verwaltung des Mittelalters als Vorbild der späteren territorialen Verwaltung. (1895)

Der Ursprung der deutschen Stadtverfassung. (1822)

Das ältere deutsche Stadtwesen u. Bürgertum. 2. Aufl. 1905)

Die neue historische Methode. (1892) (Hist. Zeitschr. Bd. 81)

Territorium und Stadt. (1900) (2. Aufl. 1923)

Zur Würdigung der historischen Schule der Nationalökonomie. (1904) (Zeitschr. f. Soz. W. 1904)

Die Ursachen der Rezeption des römischen Rechts in Deutschland. (190.)

Der deutschen Staat des Mittelalters. (1914)

Die Ursache der Reformation. (1916)

Deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unseren Tagen. (1916. 2 Aufl. 1924)

Kriege und Friedensfragen. (1917)

Problem der Wirtschaftsgeschichte. (1920)

Zur Geschichte der deutschen Geschichtswissenschaft. (1921) (Historischen Blättern Bd. 1. Heft 1. u. 2.)

Deutsche Reichspolitik einst und jetzt. (1922)

Deutsches Stadtwesen in älterer Zeit. (1922) (Archiv f. Weltwirtschaft)

Zur Stellung G. Schmollers in der Geschichte der Nationalökonomie. Schmoller's Jahrbuch 3d. 48. 1924)



- 15) L. Brentano, Die Anfänge des Modernen Kapitalismus, 1916.
- 16) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, 1920
- 17) v. Below, Das kurze Leben einer viel genannten Theorie. (Problem der Wirtschaftsgeschichte, S. 1-27)
- 18) 同上, Territorinn und Stadt. Der Osten u. der Westen Deutschland.
- 19) S. Steinberg, a. a. O. S. Meyers, Lexikon, 7 Aufl. 1925. Bd. II. ff.